

あたまを耕すー3

中間試験、お疲れ様でした。中学高校では中間と期末試があります。これらの試験でよい点数を取ることが大切ですが、本当は試験でよい成績を取ることが勉強の目的ではありません。勉強の目的はそれぞれの科目の内容を理解することにあります。つまり、英語や数学や国語や理科や社会で学ぶことを本当に知っている状態になることです。もちろん、これら全てにおいて深く知る必要はありませんし、入学試験などのためには、本当に理解しているかどうかより、よい点数を取る方が大切になるでしょうから、受験勉強においては「点数を取る技術」を身につけることも必要でしょう。しかし、本当に自分のためになるのは、そういう技術よりも、色んな科目の勉強を通じてものの考え方や知識を身につけることです。

閑話休題（さて、を難しく言うところなる）、このプリントでは「考えるとは何か」ということを考えています。前回、考える前にものごとをよく見て観察しなければならないと言いました。また単に「見る」だけではだめで集中して見ようとする気力が不可欠だとも。

しかし、「見ること」と「考えること」とは違います。しっかり見るが必要なのは、見ることによって考えるためのデータ（材料）を知性（intellect 頭脳）に供給するためです。ひとたびデータが与えられれば、知性はもう何も見ずに考えを進めていくことができます。そんなことができるのは、データが供給されると、それを貯蔵し、つなぎ合わせたり切り離したりする能力が人間には備わっているからです。その機能が想像力と記憶力です。

だから人間は現実世界にない存在を頭の中でこしらえることができる。日本では河童や八岐大蛇（やまたのおろち）など、西洋ではフェニックスやリバイアサンなどの空想上の生物がその例です。あるいは、小説という文学は、虚構の世界を描き出します。ただし、まったく現実とは無関係かという、そうではない。現実存在するものの一部を取って切り貼りして作り出しているわけです。小説の場合、とてもリアリティーの高いものもあり、「これは虚構の世界のことが書いてあるから、役に立たない」とは言えないものも多いです。



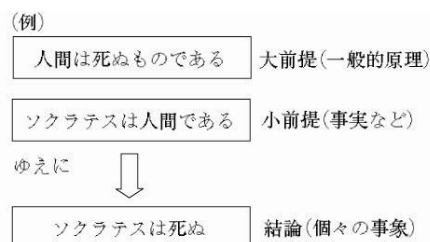
リバイアサン

この想像力と記憶力については、また別の機会に扱うことにして、今は「考える」ということが、ひとたび五感によってデータを得たら、もう目や耳に頼らずとも、できるという点に注目したいと思います。

考えるということの一つが推理です。推理とは一つの真理から別の真理を導き出すことです。アリストテレスの論理学によれば、この推理を正しく進めていく方法に三段論法というものがあります。その一例は、「人間は死ぬものだ」（大前提）、「ソクラテスは人間だ」（小前提）、ゆえに「ソクラテスは死ぬ」（結論）と

いうものです。

人間は多くの場合、このように推理によって新たなことを知っていきます。ただし、その推理に入る前に目や耳で外の世界を観察するという段階が必要です。上の例で言えば、「人が死ぬ」ということも「ソクラテスが人である」ということも観察によって知る。その観察によって得たデータを、今度は知性（頭脳、頭）が比較検討して結論を導き出すのです。ただし、何も前提を考えずに、いきなり結論に達することができたと思う時があるかも知れません。



そういうものの知り方を直観 intuition と言います。しかし、本当は、上に言った推理をすごい高速でしているの、あたかも瞬間的にもものを知ったかのように感じるだけのことです。

このような推理をするときに、つまり考えているときに、知性を使っている道具は何でしょう。それは「人間」「死ぬ」「ソクラテス」という三つの概念 concept です。概念はいったん形成されると、もうそれが生まれた現実と切り離して使うことができるので、目や耳をシャットダウンしても考えることができるのです。でも、概念って何でしょう。これはちょっと複雑な問題なので、ここでは頭（知性）の中に造られた「何かを意味するもの」としておきましょう。でも、概念だけでは使い物になりません。それが使えるようになるためには、概念を言葉にしなければなりません。

ときどき、「わかっているのだけれど、それを言葉にできない」という経験はありませんか。それは概念ができているのだけれど、その概念を言葉にすることができない状態です。しかし言葉にできなければ、それ以上考えを進めていくことはできません。

すなわち、「考える」ということは、「言葉」の意味を理解し、それを使いこなすことと言えるでしょう。だから、言葉について習う科目、すなわち「国語」は非常に大切なのです。国語ができなければ、他の科目も難しい。なぜなら、社会や理科はもちろん、英語や数学ですら日本語を使って説明するのですから。実は一見そうは見えないスポーツや芸術の技術を教えるのにも言葉は大切なのです。これについてはまたいつか見ましょう。

また読書が勧められるのもこのためです。本を読むとは、著者が言葉で表した考えをたどっていくことです。だから、読みながら、これらの言葉と文章で著者は何を言いたいのかを自然に考えているのです。もし私たちが足の筋肉で考えるなら、毎日ランニングをすればよく考えることができるようになるでしょう。もし腕で考えるならば、毎日腕立て伏せをすれば賢くなるはず。しかし、考えるのは脳みそを使ってです。その脳を鍛えるには、読書が役に立つ。以前テレビの番組で、二人の人に実験台になってもらって、一人には目をつむって沈思熟考（じっくり考えるということ）してもらい、もう一人には本を読んでもらって、どちらの脳波がより活発かを見るという実験をしていました。その結果は、読書をする人の脳波の方がずっと活発だったのです。これは読書が脳を働かせる行いであることを示しているのではないのでしょうか。



最初に戻りますが、考えると言うことのために概念（それを表す言葉）が必要だということは、考えるためにはその前に色んなことを知らねばならない、ということです。だから、「考える」ことの方が「暗記をする」ということより ちょっと言い過ぎかも優れているなどとは言えないということになります。「覚える」（暗記する）ということと、「考える」ということは相反することではなく、互いに補い合う関係にあります。

世間では、「暗記科目」である社会がよくできる人より、「考える科目」である数学ができる人の方が頭がよい、と考えられています。しかし、世の中では数学では解決できない問題が沢山あります。そういった問題を解決するために策を考えるには、いろんな種類の知識（と経験）が必要となります。だから、いわゆる暗記科目と呼ばれている科目もしっかり勉強しても決して損になりません。多くの知識を身につけることは考える人になることを邪魔するのでは決してありませんので。